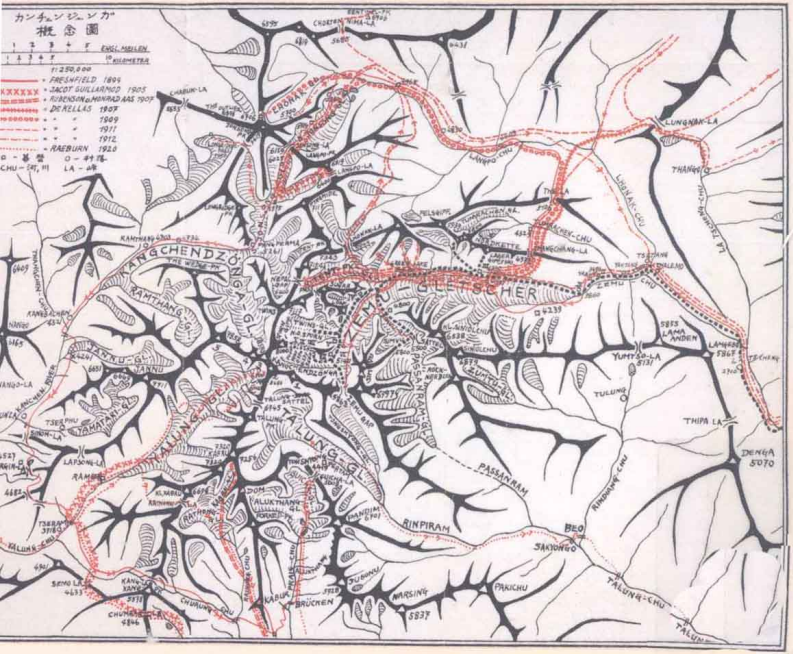
ヒマラヤに挑戦して

パウル・バウアー
伊藤 愿訳


カンチェンジュンガ
概念図
ENGL. MEILEN
KILOMETER
1:250,000
FRESHFIELD 1899
JACOT GUILLARMOD 1905
KURZENONE AND NAD 1905
DE RELLAS 1907
1909
1911
1912
RAEBURN 1920
CHU = 河, 川
LA = 峠
KANGCHENDZÖNGA
KANGCHENJUNGA
KANGCHENJUNGA
KANGCHENJU

中公文庫 ©1992

ヒマラヤに挑戦して

一九九二年二月二五日印刷
一九九二年三月一〇日発行

著者 P・バウアー
訳者 伊藤 愿

発行者 嶋中鵬二

整版印刷 三晃印刷
カバー トーブロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四

ISBN4-12-201889-7
Printed in Japan

中公文庫

ヒマラヤに挑戦して

パウル・バウアー
伊藤　愿訳

目次

訳者のことば 13
一 ヒマラヤ行の決心 17
二 準備 21
三 ミュンヘンからセイロンへ 30
四 ダージリンへ 43
五 シッキムを通って 56
六 ゼムゥ谷へ 72
七 偵察 90
八 カンチェンジュンガ 111
九 退却 151

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

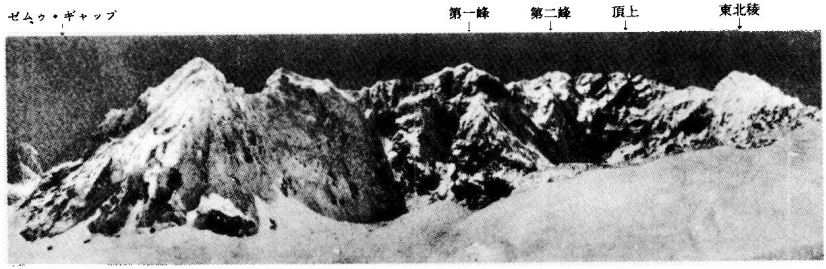
付録

I 日誌 254
II 経費 230
III 食糧 227
IV 装備 220
V 写真 211
VI 医学的現象 202
VII カンチェンジュンガの高度および名称 192
VIII カンチェンジュンガの天候 185
IX 地図についての注意 178
X 文献 175

解説 上田豊 257

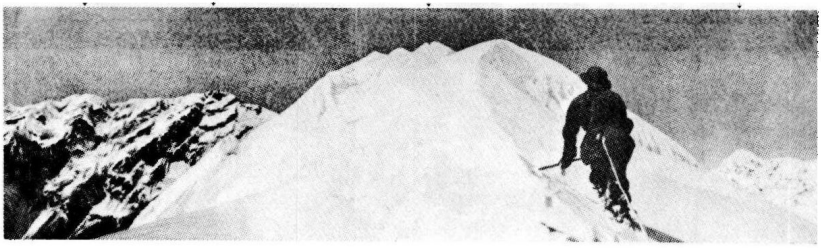
カンチェンジュンガ　近景はグリーン・レークの平原とゼムゥ氷河の堆石堤

幕営Ⅲの北にそびえる北山脈 Nordkette



幕営Ⅵからのカンチェンジュンガ

幕営VIII（6270m）より北から東，東南へのパノラマ



東北稜約7200mの地点にて

幕営VIIIaよりシニオルチュを望む

ゼムゥ氷河よりテント・ピーク（7343m）を望む

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

ヒマラヤに挑戦して

一九二九年、カンチェンジュンガを目指した
ミュンヘン・アカデミーの登山報告書

幕営VI付近の難場　遠景はシムヴゥ

訳者のことば

亜細亜の地、「世界の屋根」と称ばれるヒマラヤは、今猶お処女地、ここに聳立する二万フィート以上の高峰は、千座を超ゆるにもかかわらず、その頂を究められたものは漸く二十あまり、未だ三十にはならない。七十有余座を算える二万四千フィート以上の高峰に至っては、その頂に人類の足跡を印したもの、僅かに、二座にすぎない。未だ人間の触感を知らない高峰が、斯くも夥しく蟠踞している「ヒマラヤ」は、パイオニヤーの精神を承け継ぎ、若い意欲に燃えた登山者にとって、大きな魅力である。

一九二九年、パウル・バウアー氏の率いる精悍なババリヤ隊は、「ヒマラヤ」に憧れ、経済的に窮乏し切った独逸から、あらゆる障害を踏み越えて、敢然、ヒマラヤン・エキスペディションを企てた。而も、世界第三位の高峰カンチェンジュンガ（二八、一四六フィート）に挑戦して、長年の固い友情を力とし、一糸乱れぬ統制のもとに、困苦欠乏に耐え、七千メートルの高所に真摯な努力を捧げ、世界の登山史上比類少しと云われたほどの壮烈な奮闘を続けた。氷雪の中に窖を穿って臥寝し、行手を阻む氷塔にトンネル

を鑿って猛進し、新しい独特な登山術を編み出して、二四、二七〇フィート迄登攀し乍ら、突如、冬に襲われて、「昨日までは未だ前進のことのみ考えていた。だが今日は、果して無事に山を下れるかどうか、それを憂慮しなければならない」という死地に陥り、万斛の血涙を呑んで引き返さなければならなかった。而も彼等は、かのエヴェレスト登山にも匹敵するほどの輝かしい業績を残し乍ら、甚だ謙遜な報告書を公表した。それはすなわち、今ここに訳出した Paul Bauer : Im Kampf um den Himalaja である。この報告書は些かのジャーナリズムなく、また少しの粉飾も加えてない。然し、そこに盛られた精神こそは、我々の世界を無限に押し拡げずには措かないものである。その登攀記は甚だ簡潔であるが、我々はこれによって、ヒマラヤン・エキスペディションに大変革を齎らした彼等ババリヤ隊のシステム、彼等の独創性、彼等の真価を、十分に窺知することが出来る。尚、一般記録の外に、食糧、装備、写真等の、エキスペディションの準備に就ての記載が為されている。就中、その経費の公開は、我々に取って何物かを暗示せずには措かない。

要之、この書は、ヒマラヤ登山の報告書としても白眉、而も、「如何にしてヒマラヤン・エキスペディションを為すべきか」を教える、親切をきわめた新しいテキスト・ブック、注意深く読まなければならぬ貴重な文献である。

バウアー氏は今年また、そのババリヤ隊の指揮者として、カンチェンジュンガの再挙を企て、既に本年五月独逸を出発し、いま、カンチェンジュンガの東北稜にあって、ひたすらに頂上を目指して、真剣な奮闘を続けている。一昨年惜しくも敗れた彼等は、いま、前回の経験から得た如何なる新しい戦術を秘めて、カンチェンジュンガ登頂の機を覗っているのであろう？

昨年は、ジョンソン峰（二四、三四四フィート）が、また今年は、カメット峰（二五、四四三フィート）が登られて、人類によって登頂された最高峰のレコードとなり、第三回のエヴェレスト遠征以来、一時抑えられていたかの観があったヒマラヤン・エキスペディションの気運は、最近に到って、俄然、熾んとなり、今や各国は競って、年毎にヒマラヤ遠征隊を派遣するに至った。この秋に当って、我国の登山者は何を為すべき乎。多数の欧米人が、亜細亜の地「ヒマラヤ」に足を伸して、盛んに活躍している今日、亜細亜の盟主を以って自任する我国の、第一線に立つべき登山者は何を考えているのか？空虚なるイデオロギーを捨て、懶惰退嬰の重圧を排して、日本の若き登山者よ、世界の舞台に進出せよ！

この出版に当って訳者に与えられたアカデミッシェル・アルペンクルブ・キョウトの部員諸兄の後援、就中、今西錦司、西堀栄三郎、桑原武夫、細野重雄諸氏の絶えざる指

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong